旭の里山・生きもの写真集

（岡山県美咲町旭地域）

その4　秋の花

1.オモダカ(オモダカ科)2020.0908

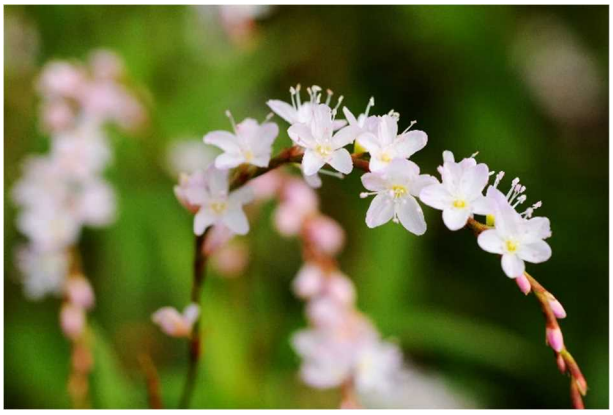
2.セトウチホトトギス(ユリ科)　2015.09.18

3.ヒガンバナ(ヒガンバナ科)　2020.09.25

4.ツルボ(キジカクシ科)　2015.09.03

5.ヤブラン(キジカクシ科)　2018.09.13

6.コナギ(ミズアオイ科)　2016.09.14



7.サクラタデ(タデ科)　2013.09.28

8.ミゾソバ(タデ科)　2013.09.28

9.ゲンノショウコ(フウロソウ科) 2016.09.14

10.アカバナ(アカバナ科) 2015.09.08

11.クズ(マメ科) 2015.09.04

12. キンミズヒキ(バラ科) 2020.10.13

13. リンドウ(リンドウ科) 2018.10.25

14.センブリ(リンドウ科) 2020.10.19

15.ナンバンギセル(ハマウツボ科) 2019.09.07

16.ツルニンジン(キキョウ科) 2010.10.16

17.ヤクシソウ(キク科)　2015.10.05

18.アキノノゲシ(キク科)　2014.09.24

19.ヨメナ(キク科)　2020.10.13

20.ノコンギク(キク科)　2020.10.07

21.シラヤマギク(キク科)　2020.09.13

22.アキノキリンソウ(キク科)　2016.11.02

23,サワヒヨドリ(キク科)　2020.09.25

24.ヒヨドリバナ(キク科)　2013.08.28

「秋の花」 一口解説

1.オモダカ[面高]：別名ハナグワイ。水田や湿地に生えるが最近は減少。上の方に雄花、下の方に雌花がつく。写真は雄花。クワイはオモダカの一品種で地下の球茎部を食べる。

2.セトウチホトトギス[瀬戸内杜鵑草]：北斜面などやや湿った場所に生える。茎は 50cm ほどにもなり、崖では垂れ下がる。花全体に紫色の斑点があり、花の中心部には黄色い部分がある。

3.ヒガンバナ[彼岸花]：別名マンジュシャゲ。花の時には葉はなく、花が終わった 10 月頃から葉が出る。葉は冬も青々として冬枯れのあぜでよく目立つ。他の草にさえぎられることなく太陽光を受け、春になって他の草が伸び始めるころに枯れる。古い時代に中国から渡来したと考えられている。地下の球根（鱗茎）は有毒だが水にさらすと抜けるので、飢饉（ききん）の時には非常食として利用されたという。ふつう種子はできない。

4.ツルボ[蔓穂]：８月後半～９月に淡紅紫色の小さな花を穂状にたくさんつける。名の由来は不明。以前はユリ科とされていた。

5.ヤブラン[薮蘭]：ランの仲間ではない。山野の日陰に生える。園芸種も多く、丈夫で手がかからないので庭や公園などにもよく植えられている。これも以前はユリ科とされていた。

6.コナギ[小菜葱]：かつては水田にはびこる強害草とされたが除草剤の使用などで減少。しかし田の片隅などで結構見かける。希少種ミズアオイと近い植物。

7.サクラタデ[桜蓼]：名を付けよと言われたら誰でもこう名付けるだろう。高さ 0.5～1m 位で大きな群落になると見事。昔は「タデ」というとこれのことだったと言う地元のお年寄りもいる。しかし最近は激減しているようで、岡山県では準絶滅危惧種。

8.ミゾソバ[溝蕎麦]：別名ウシノヒタイ[牛の額]。葉の形が牛の顔を思わせることから。湿った場所に群生する。花は美しいがあまりにも多いので珍重されることはない。

9.ゲンノショウコ[現の証拠]：別名ミコシグサ[神輿草]。下痢止めの民間薬として有名で、よく効くことから「現の証拠」の名がついたというのはよく知られた話。別名は種子を散らした後のカラが巻き上がってみこしの屋根のような形になるからで、一度見ると納得。赤紫色の花もあるがこの地では白が多い。

10.アカバナ[赤葉菜、赤花]：秋に葉が紅葉し、春は食べられるので赤葉菜となったという。確かに花はピンク色で赤ではない。花の時期は７月～9 月で、「夏の花」の方がふさわしいかもしれない。

11.クズ[葛]：秋の七草のひとつ。根のでんぷんを精製したものが葛粉（くずこ）で食用に。大株の根の皮を除いて乾燥させたものが葛根（かっこん）として薬用に使われる。かつては葉が飼料として利用されたようだが、それもなくなり蔓が長く伸びて他物にからむので厄介な植物となっている。

12. キンミズヒキ[金水引]：黄色い小花の房が長く伸びるので、タデ科のミズヒキとの対比でキンミズヒキ。花は美しいが、花後の実は細かなカギ状のトゲがたくさんあって衣服にくっつくので困る。

13. リンドウ[竜胆]：山道でも見かけるが、田の法面などでも秋が深まった頃から咲き始める。競演の花々のフィナーレを飾るにふさわしい存在感。根茎を乾燥させたものが薬用の竜胆（リュウタン）。

14.センブリ[千振]：日当たりと湿り気のある草地に生えるがすくない。高さ 10～25cm。全草に苦味成分をもち、苦味健胃薬として有名。名は千回振り出しても（煎じても）なお苦味が出るということから。

15.ナンバンギセル[南蛮煙管]：別名オモイグサ[思草]：花は７～９月。葉緑素をもたず、主にススキの根に寄生する。葉はなく、茎もほとんど地上に出ず花の柄が 10cm ほど伸びている。「道の辺の尾花が下の思ひ草今更々に何をか思はむ」（万葉集、作者未詳）。

16.ツルニンジン[蔓人参]：別名ジイソブ[爺ソブ]。林内に生える多年生のつる植物で、名は太い根が朝鮮人参の根に似ることから。別名は信州の方言由来で「お爺さんのそばかす」の意。バアソブ[婆ソブ]というよく似た植物に対比して付けられたという。いずれも花の内側のまだら模様を老人の顔のそばかすに例えたもの。

17.ヤクシソウ[薬師草]：山野に生え、よく枝分かれして大きな株になるので花の時期は見事。それまでに刈られてしまうことも多いが昆虫たちの晩秋の貴重な蜜源なので、できれば残してやりたい。名の由来は不明。

18.アキノノゲシ[秋の野罌粟]：日当たりの良い草地や荒地に生える。高さが 2m ほどにもなり、そうなると花の美しさがわからなくなってしまう。

19.ヨメナ[嫁菜]：道端や田のあぜなど、湿り気があって日当たりがよいところに普通。高さは 50cm～1m。野菊の中でもなじみ深いもの。葉は濃い緑色。花が散った後の毛（正確には冠毛）はごく短く、花が完全に脱落した後はイガグリ頭のよう。春の若葉は食用にされる。

20.ノコンギク[野紺菊]：これも山野でなじみ深い野菊。群れ咲くこともある。高さは 50cm 前後が多い。花の色は淡青紫色で濃淡の変異がある。ヨメナと紛らわしい場合もあるが、ノコンギクの葉や花は密に着くこと、開く前の花びら（正確には舌状花）の色が濃い紫色であること、花が完全に脱落した後には毛（正確には冠毛）の束があって筆のように見えること、などの違いがあり慣れると間違うことはない。

21.シラヤマギク[白山菊]：高原や林縁に普通。1～1.5m と大きくなる。白い花びら（正確には舌状花）は不ぞろい。下部には柄のある心臓型の大きな葉がある。春の若芽は嫁菜に対して婿菜（むこな）とよばれ食用にされる。

22.アキノキリンソウ[秋の麒麟草]：別名アワダチソウ[泡立草]。日当たりのよい山野に生える。高さ 30～80cm ほど。外来種のセイタカアワダチソウと同じ仲間だが、はるかに清楚な印象。

23.サワヒヨドリ[沢鵯]：日当たりのよい湿原に生える。高さ 40～80cm ほどで茎は赤みを帯びることが多い。葉は柄がなく対生または輪生。茎の上部で分枝し、先端部に淡赤紫色まれに白色の細かい花が多数つく。糸のように出ているのはめしべの一部。

24.ヒヨドリバナ[鵯花]：山野の日当たりのよい場所に生え、高さは 1m を超えることもある。葉は短い柄があり対生する。花は白が多いがまれに淡赤紫色のものも。サワヒヨドリの花と同じような構造。茎は通常緑色で下の方からよく枝分かれする。

里山雑記帳

(2)きれいな花だけど…

写真の花を見られたことがあると思います。オオキンケイギク[大金鶏菊]という名の宿根草で、5 月～7 月頃道沿いや土手などに群生して鮮やかな黄色の花を咲かせます。北アメリカ原産のキク科の植物で、もともとは観賞用や緑化用として明治時代に導入されました。しかし広く野生化し繁殖力が強いので、日本の自然に重大な影響を及ぼす恐れがあるとされ、2006 年に外来生物法に基づき特定外来生物に指定されました。栽培・移動・販売などが法により禁止されたのです。確かに強い植物で、刈り払ってもすぐに伸びてきます。このため増えてしまうと、在来のカワラナデシコ、オミナエシ、野菊類など、同じような環境を好む在来の植物が駆逐され姿を消してしまう可能性が高いのです。一斉に花を咲かせているオオキンケイギクは確かにきれいで、刈らずに残しているような場所も見かけます。しかし外来植物によって里山の自然や景観が変わってしまうのは好ましいことではありません。花に罪はないですが、やはり増えないように駆除することが必要でしょう。(T)

リーフレットその４発刊にあたって

里山の生きものたちの姿を多くの人々に紹介し、そのような生きものたちが身近にいることの価値を感じていただきたいとの思いで、生きものたちの写真を集めたリーフレットシリーズの製作を行っています。今回は、「その４　秋の花」を製作しました。

春・夏・秋と分冊になっていますが、もちろん自然は切れ目なく移ろっていきます。どちらに入れるのがよいか迷うようなものも多くありましたが、当地での花の盛りの時期を考えて分けるようにしました。

秋に咲く花は、夏のそれと比べると数も少ないし、派手な色彩のものもヒガンバナぐらいしか思い浮かびません。でも、ひんやりとした空気感の中で見る花々は味わい深く、心に染みるようです。昔の人たちは、楽ではない日々の営みの中でもこれらの花々を愛し、そっと刈り残すようなことをしてきたのではないのだろうか。そのような気がします。

晩秋の天気の良い日には花々に多くの昆虫が来ています。冬を迎える前の大切な栄養源になっているようです。作物の受粉に活躍する虫たちのためにも、在来植物で邪魔にならないものは刈らずに残したいものです。

掲載の写真は岡山県久米郡美咲町旭地域（旧旭町）で撮影したものに限定しています（撮影場所の詳細は非公開とさせていただきます）。紹介できた植物はごく一部に限られていますし、内容的に不十分な点も多いと思います。どうぞご容赦ください。見ていただいた感想などをお寄せいただけるとありがたいです。（石原隆志）

旭の里山・生きもの写真集　その４　秋の花

2020 年 11 月発行
発行責任者：石原隆志（岡山県自然保護推進員）、石原八束（同）
連絡先：hoonoki@mx32.tiki.ne.jp　　HP: http://hoonoki-koubou.jp「岡山中北自然観察誌」

協力：岡山県自然保護センター、旭の自然を守る会

表紙写真：リンドウ（リンドウ科）　2016.11.02 撮影
裏表紙写真：ヒガンバナ（ヒガンバナ科）　2016.09.14 撮影

※このリーフレットは、公益信託タカラ・ハーモニストファンド令和 2 年度活動助成を受けて作成しました。
※植物の和名と分類は「山渓ハンディ図鑑 1　増補改訂新版・野に咲く花」、「同 2　増補改訂新版・山に咲く花」に従いました。